

キルケゴールの「瞬間」について

——時間と永遠との関係について——

菊池史郎

目次

はじめに

序論

第一章 直接的同時代性

第一節 識別不可能性

第二節 教師と弟子

第三節 信仰による目撃

第二章 永遠的同时性

第三章 歴史的同时性

第一節 模範

第二節 模倣

第三節 信仰と実践

第四章 罪

第一節 信仰から実践への方向

第一項 信仰者の倫理

第二項 まねびの真摯さ

第三項 第一倫理学と第二倫理学

第二節 実践から信仰への方向

第一項 罪の自覚

第二項 罪の赦しに絶望する罪

第三項 躓きを克服する信仰

結論

キルケゴールはイエス・キリストとの同時性ということをキリスト教信仰が成立するための根本的な条件であると考え、さらにまた信仰の本質そのものであると考えた。本論ではキルケゴールのこの同時性の思想に注目してみたいと思う。

キルケゴールの考える同時性ということは大きく二つの意味に分けて考えることができる。ひとつは「最高度に非歴史的な人格」としてのキリストとの同時性という意味での「永遠的同时性」であり、もうひとつは歴史的人格としての地上のイエスとの同時性という意味での「歴史的同时性」である。この両者は明確に区別され、キルケゴールによれば信仰の本質は永遠的同时性の方であるとされる。

信仰にとっては例えば直接的な「同時代性」といった意味での歴史的同时性は意味をなさず、「地上に信仰が存在する限り決して過去のものとはならない」というキリストの永遠的同时性と人間の側が信仰において同時となることこそ重要であるとされるのである。

しかしながら、この永遠的同时性は歴史的同时性と全く無関係に成立するわけではない。永遠的同时性が成立するには単なる直接的同時代性ということとは違った意味での歴史的同时性との関係が必要とされる。この意味での歴史的同时性とは、つまり歴史的人格としてのイエスと「実存的に同一の場に立つ」という意味のものである。この意味での歴史的同时性が信仰の唯一の証となり、また信仰

の歴史的前提としての意義を持って永遠の同時性と特別に関係すると考えられる。キルケゴールにおいては永遠の同時性と歴史的同時性はつきりと区別されながら、しかし両者は互いに密接に関係して信仰の本質を形づくるものとして考えられているのである。

ではこれら永遠の同時性と歴史的同时性との関係とは具体的にどのようなものであるか。本論ではこの両者の関係について詳しく考察していきたいと思う。

まず第一章では直接的同時代性、ということについて考察する。キルケゴールの考える歴史的同时性とは、まず第一にこの直接的同時代性ということの意味していると思われる。キルケゴールによれば、この意味での歴史的同时性は信仰にとっては全く意味をなさないとされる。ここではまずこの直接的同時代性ということの意味を確認し、なぜそれが信仰にとって意味をなさないとされるのか、その理由を明らかにしたい。

ついで第二章では永遠の同時性ということについて考察する。キルケゴールによれば、非歴史的人格としてのキリストはすべての「歴史的なもの」から質的に区別される存在であって、あらゆる「相対的なもの」を越えた「絶対的なもの」であるとされる。永遠的同时性とはそのような「絶対的なもの」としてのキリストとの関係を指している。ここではこの「絶対的なもの」との関係ということがキルケゴールにおいてどのように考えられているのかを明らかにし、永遠的同时性ということの意味を明確にしたいと思う。

ここまでの段階で信仰がまず内面の問題であり、そして信仰とはあくまで永遠に現在するというキリストとの同時性であることがわかる。しかしそれにもかかわらず、キルケゴールにおいては歴史的人格としてのイエスとの同時性ということが極めて重要視される。永遠的同时性ということが信仰の本質ではあっても同時性の場面から歴史的同时性は排除されず、むしろ信仰に不可欠の要素として考えられているのである。この意味での歴史的同时性が、地上のイエスと実存的に同一の立場に立つという操作を通して実現される、模範としてのイエスに倣うという意味での歴史的同时性である。第三章ではこのような歴史的同时性について論じたいと思う。実存的に同じ立場に立つとはどういうことであるのか、またイエスに倣うとは何を意味しているのか、これらの点を明らかにする。そしてこれらの点が明らかになった後で、永遠的同时性と歴史的同时性との関係について論じたいと思う。

このようにして永遠的同时性と歴史的同时性との関係をひとまず示すことができる。しかし実質的にはこの両者が具体的にどのような関係にあることができるのかを示さなければならない。

そこで第四章では、そのような問題意識のもとで、特に罪の問題を中心に考えてみたいと思う。そしてキリストを信じるということと地上のイエスにならうということが信仰者の日常的現実においてどのように結びつくのか、ここではこの点について考察する。

最後にキルケゴールの同時性の思想が、神学的には義認と聖化、

キルケゴールにおいては瞬間と反復の問題であること、そしてこの思想が時間と永遠の問題を含んでいることについて触れたいと思う。

実存があらゆる実存段階を貫いて最終的に到達する、キルケゴールの考えるキリスト教信仰とは、すなわちイエス・キリストと同時的となって生きることである。それは天に挙げられて永遠に現在するキリストの永遠的同时性に靈的に参与することであるとともに、それにふさわしく、信仰者の側の真摯なまねびの行為において、地上のイエスの苦難との実存的歴史的同時性でなければならない。信仰者は、瞬間の自己化によって常に絶対的逆説と共にありつつ、絶望と躓きを克服する日々の絶えざる戦いの中で、罪の赦しを自己化し、その作用として実践を自己に課せられた倫理として受け取り、神の前に謙って反復的行をなすことにおいて真に現在を生きるのでなければならない。

『メノン』の結論についての考察

齋藤直子

目次

- 第I章 予備的考察(一)
 - 第1節 「結論」をめぐる問題 ―何が問題か―
 - 第2節 「結論」までの道筋 ―どのようにして「結論」は出されたか―
- 第II章 予備的考察(二)
 - 第1節 A.E.Taylorの見解
 - 第2節 K.V.Wilkesの見解
- 第III章 「結論」の方向性
 - 第1節 「正しい思わく」の重要性
 - 第2節 Wilkes説の批判
 - 第3節 「結論」の意味するもの

徳が何であるかを主題とするプラトンの対話篇『メノン』において、全体として徳は知識であるということが述べられているのにもかかわらず、「結論」では徳は知識ではなく教えられないものであると締めくくられている。そのため、この「結論」は不可解であり、困惑させられるものであり、この点について様々な評価がなされてきている。本論では、この「結論」に関して有力であると思われる